長恨歌　日本経済新聞 2023.10.28

王　安憶著

上海復興期のはざまを活写

19世紀後半以後、近代都市として急成長した上海は、2度の大復興期を経験している。1度目は1945年8月の日本敗戦後から人民共和国成立まで4年間のオールド上海復活期、2度目は80年代の改革・開放期（正確に言えば90年4月「上海浦東新区」建設決定以後）から世界都市としての復活までの数年間である。

長篇小説『長恨歌』は、2つの復興期の間を生きた上海女性の恋愛と友情とを描く。

46年、上海中流家庭のお嬢さんであった王琦瑶は、女学校の2人の親友の勧めでアマチュア写真家のモデルとなり、ミス上海コンテストに応募し、裏工作を展開する大官や富豪の令嬢・愛人に伍して堂々3位入賞を果たす。そして国民党政府高官に求愛されて彼の最愛の愛人となるが、急転回する国共内戦下で高官は死亡し、彼女は生前贈与の金塊を隠匿しつつ、49年から始まる社会主義体制を町角の衛生係や編物係として生き延びようとする。

しかしその名も〝琦瑶（宝石）〟の耀きは隠しようもなく、それに惹かれた元資産家の一人息子と恋仲となり妊娠する。この反革命行為を隠蔽するため、彼女はソ連人女性と結婚した革命工作者を父とする欧亜混血の遊び人とも関係を持ち、娘の薇薇を産む。

61年生まれの薇薇は古き良き上海娘の品格と知性を欠いていたが母の助けにより堅実な伴侶を得て、上海の経済発展開始前に幸運にもアメリカへと出国する。一人住まいを始めたこの伝説的美女の前には、彼女を慕う若者が次々と現れるが……。

作者の王安憶は上海物の名作の数々を発表して来た中国文壇の代表的作家である。また著名な美文家でもあり、本作でも中流の上海人が住む伝統的石庫門（華洋折衷の集合住宅）、それが立ち並ぶ横丁〝弄堂〟の鳥観描写や、変遷する上海女性ファッションの細密描写を展開して、読者を魅了する。

そのいっぽう、本作にも歴史の空白を仕掛けている。たとえばあの凄惨な文化大革命（66～76年）を、元国民党高官愛人が無事やり過ごし、金塊を守り通すのは至難の業であったろう。その意味で本作後半は、オールド上海の気品高き女性を愛する作者の夢物語と理解すると良いであろう。

（飯塚容訳、アストラハウス・3520円）

▼著者は54年南京生まれ。80年から本格的に作家活動を開始。著書に『終着駅』など。

《評》名古屋外国語大学図書館長　藤井　省三